

月に浮かぶ馬

9月、乾燥して青みがかった粘土質の、アフリカの海に崩れんばかりに突き出ているその高地で、野山は長い夏の日々の猛威にすっかり乾ききり、もの悲しげだった。まだ辺り一面をぎざぎざと黒ずんだ麦の刈り株が覆い、アーモンドの木がまばらに生え、ところどころに樹齢が100年にもなるサラセンオリーブの切り株が点在していた。それでも、新郎新婦が、新婚旅行の少なくとも初めの数日をそこで過ごすことは決まっていた、それは花婿を慮ってのことだった。

婚礼の昼食は人里離れた古い屋敷の広間に用意されたが、実際のところ、それは招待客のための宴席ではなかった。

招待客は、そのでっぴりと太った二十歳そこそこの若者の様子とふるまいに狼狽していた。真っ赤な顔をして狂ったようにぎらぎらと黒く光る小さな目であちこちを見回し、もはや何もしようとせず、飲むことも食べることもせずに、顔をいっそう赤黒く染めたかと思うとほとんど黒みを帯びたその様子に、誰ひとりとして当惑を抑えきれずにいた。

彼が狂信的な愛に心を奪われ、いま隣に座っているその娘、つまり花嫁のために馬鹿げたことをしでかし、自殺をはかろうとまでしたことは知れ渡っていた。彼はたいそう裕福で、由緒あるベラルディ家の唯一の跡取りであったが、それに引きかえ彼女は1年前からシチリアに来た連隊の、歩兵隊の連隊長の娘でしかなかった。けれども、島民に対してよくない先入観を抱いていた連隊長は、そんな田舎者たちのもとに娘を残していかないためにも、その結婚を認めたくはなかったようだ。

花婿がとりわけ若々しい雰囲気の花嫁と対照をなすにつれて、彼の様子とふるまいに対する招待客の当惑は膨らんでいった。一方、花嫁はまさしくまだ子どもで、澁刺として陽気で、その場にはそぐわなかった。煩わしい考えがあると、絶えずそれを払いのけているようで、そのたびごとに無邪気で愛らしさに溢れながら、同時に抜け目なくもある鋭い動きを見せていた。しかし抜け目ないとはいっても、まだ何も知らない悪戯っ子のようなものだった。片親をなくして小さな頃から母親を知らずに育ち、実際、まったく準備が整わないままに結婚するのは明らかだった。昼食を終えてしばらく経ったとき、人々は花婿に向けられた彼女の叫び声にぞっとして苦笑した。

「まあ、どうでしょう、ニーノ、どうしてこんなにちっちゃい目をしているの？ 放つてよ……。いやだ、あなたとっても熱いわ！ どうしてこんなに手が熱いの？ ねえ、ねえ、パパ、彼の手、こんなに熱いわ。熱でもあるのかしら？」

連隊長はやきもきしながら、招待客たちの出発を急がせようとした。それはほかでもなく、彼にとってきまりが悪いこの見せ物を切り上げるためだった。人々は6台の馬車に乗り込んだ。

連隊長と花婿の母親、彼女もまた未亡人であったが、彼らが隣り合わせて座った馬車は歩くような速度で大通りへ向かっていたため、わずかに遅れをとっていた。というのも、花嫁と花婿が、それぞれに馬車の片側ともう片側で父親と母親の手を取り、遠く離れた町へ続く大通りの入口まで、しばらく歩いてついていきたがったからだ。そこまでくると、連隊長は身をかがめ、娘の頭に口づけし咳払いをしてつぶやいた。

「さようなら、ニーノ」

「さようなら、イーダ」向こう側で花婿の母親が笑いかけると、馬車はほかの招待客の馬車に追いつこうと、小気味よい速度で走りだした。

花嫁と花婿は、しばらくそのまま目で馬車を追っていた。だが実際にそうしていたのはイーダひとりで、ニーノは何を見ているわけでも、何を聞いているわけでもなかった。彼の目がただじっと見つめているのは、そこにいる花嫁だけで、とうとう彼女とふたりきりになり、そのすべてが彼のものになったのだ。だけどいったい、どうしたんだ？ 彼女は泣いているのか？

「パパ」そうやってイーダは別れのハンカチを握った手を振った。

「ほら、見える？ パパも……」

「でも君は泣かないで、イーダ……。僕のイーダ……」ニーノはそうつぶやくとほとんどしゃくり上げるようにいって、体じゅうを震わせながら彼女を抱きしめようとした。

イーダが彼を遠ざけた。

「いやよ、放してちょうだい、お願いよ」

「涙を拭いてあげたいんだ……」

「いえ、いいのよ、ありがとう、自分で拭くから」

ニーノはそのままそこで、ぎこちなく、情けない表情で口を半ば開けて彼女を見た。イーダは涙を拭って彼に尋ねた。

「まあ、いったいどうしたの？ あなた、体じゅう震えているわ。あら、やだ、ニーノ、そんなふうに私の前に立たないでよ！ 笑っちゃうじゃない。ねえ、ちょっと、もし笑いだしてしまったら、私、止められなくなっちゃうわ。待って、目を覚ましてあげる」

イーダは彼のこめかみに軽く触れると、目に息を吹きかけた。その指の感触に、その唇から漏れる吐息に、彼は足を無くしてしまったように感じ、跪いて崩れ落ちそうになったのだが、彼女がそれを支えてけたたましく笑いだした。

「こんな大通りで？ あなた、気でも狂ったの？ さあ、いきましょう、いきましょうよ！ 見て、向こう、あの向こうの丘を！ きっとまだ馬車が見えるわ。見にいきましょうよ！」

そして乱暴に彼の腕を取ると、引っ張っていった。

野山の周辺一帯の、牧草やさまざまなものが散在しているところは、どこもかしこもしばらく前から干上がって、休耕地にちまちまと堆積している発酵した堆肥のべとつくような生暖か

さと、いまだ生氣のあるミントやセージの鋭い芳香とが混ざり合って、まるで濃密な古代の息吹のように焼け付く暑さの中に立ち上っていた。その濃密な息吹と、べとつくような生暖かさ、つんとくる芳香を感じているのはニーノひとりだった。それに引きかえイーダは、こんもりと茂ったサボテンの陰で、干涸びた麦の刈り株の黄色みがかってぎざぎざとした束の間を走り回りながら、照りつける太陽のもとで、モリヒバリが何と陽気な声を張り上げるのか、そして呆気にとられるほどに静まり返った平地の蒸し暑さの中で、遠くの麦打ち場から時おり響く鶏の歌声が何と縁起のよいものかと耳を傾け、すぐそばの海から届いては、アーモンドの黄色くしなびてまばらになってしまった葉や、とがって灰色がかった隙間なく茂るオリーブの葉などを揺らす、ひんやりとしたさわやかな息づかいに、ときどき包まれるように感じていた。

間もなくふたりは丘の上に辿りついたが、走ってきたために彼はもはや立っていられず、倒れそうなほど疲れ果て、腰を下ろしたくなって、自分の隣に彼女も座らせるよう腰に手を回し引き寄せようとした。しかしイーダはそれをかわしていった。

「まずは見せてちょうだい」

彼女は内心、不安になってきた。だが彼にそれを気取られたくはなかった。異様に執拗な彼に苛立ち、じっとしていることができず、またじっとしているのが嫌で、もう逃げだしたいと、もっと遠くへいきたいと望み、日が出ている間は彼を動揺させて気を紛らし、そしてまた自分自身も気を紛らわせたいと思っていた。

向こうの丘からは果てしない平原が広がって、辺り一面の海のような刈り株の中、焼き畑の黒ずんだ跡があちこちへ蛇行し、黄色くぎざぎざとした麦の刈り株をかき分けるように、ところどころケイパーや甘草の茎がのぞいていた。向こうのほうへ下った、その広大な黄色い海の、遠く離れた対岸とでもいうべきところには、黒々とした背の高いポプラの木々の中に1軒の農家の屋根が見分けられた。

そこでイーダは夫に、向こうまで、あの農家までいこうといいだした。どのくらいかかるのかしら？ 1時間、もう少しかかるかもしれない。時刻は5時になったばかりだった。屋敷では、使用人たちがまだ片付けをしているに違いない。彼らは夜までに帰っていくだろう。

ニーノは反対しようとしたが、彼女は彼の手を引いて立ち上がらせ、それから急に小高い丘の短い斜面に広がるその麦の刈り株の海を、子鹿のようにしなやかに敏捷に走っていった。そんな彼女に追いつけず、彼はよりいっそう赤くなり、愚鈍な様子で、汗をかき、息を切らして走りながら彼女に呼びかけ、助けを求めた。

「せめて手を取ってよ！ せめて手を！」そう叫びつつ追いかけていった。

突然、イーダが悲鳴をあげて立ち止まった。彼女の前でカラスの群れがカーカーと鳴きながら飛び立った。さらにその向こうでは、地面に身を横たえて1頭の馬が死んでいた。死んでいる？ いや、死んではいない。目を開けているのだから。ああ、何という目だろう！ 骸骨だ。

あの肋骨！ あの脇腹！ ニーノが不意に現れて、苦しそうに息を切らし、かすれた声でいった。

「早く……、もういこう！ 戻るんだ！」

「生きてる、ほら！」イーダは嫌悪と哀れみが入り混じった声で叫んだ。「頭を上げて……。まあ、何て目をしているの！ 見てよ、ニーノ！」

「ああ、まったくだ」まだ喘ぎながら彼はいった。「ここに捨てていったんだ。放っておこう、もういこうよ！ 悪趣味だな。死にそうなのかわからないのか……」

「あのカラスたちは？」彼女が恐怖におののきながら叫んだ。「あのカラスたちは、この馬を生きたまま食べてしまうの？」

「ねえ、イーダ、お願いだよ！」彼は手を合わせて頼み込んだ。

「もういいわよ、ニーノ！」そんなふうに愚かに懇願する彼を見るにつけ、苛立ちが限界に達して彼女は叫んだ。「答えてよ、生きたまま食べるの？」

「カラスがどうやって食べるかなんて、僕が知るわけないだろう。きっと待つんだよ……」

「ここで死ぬのを待ってるの？ 飢えと渇きで？」彼女は同情と恐怖に歪んだ表情で再び話しはじめた。「年を取っていたから？ もう役に立たないから？ ああ、かわいそうに！ まったく、恥ずべきことよ、恥ずべきことだわ！ どういうつもりなのかしら、この田舎者たちは？ いったいどういうつもりなのよ？」

「悪いけど、君は動物1頭にものすごく哀れみを感じるんだな……」彼が戸惑いつついった。

「そういうふうに感じてはいけないの？」

「だけど、僕に対してはそう感じないんだな！」

「あなたがいったい何の動物だというのよ？ お腹がすいて、そして喉が渇いて、きっと今にも死にそうだというの、あなたが？ 麦の刈り株の真ん中に捨てられていると？ ねえ……、ああ、見て、カラスよ、ニーノ。ほら、上のほう、輪になって飛んでる。ああ、本当におぞましいこと、恥ずべき、残酷なことだわ。ほら……、ああ、かわいそうに……、立ち上がろうとしてる！ ねえ、ニーノ、動いてる……、きっとまだ歩けるわ……。ニーノ、ほら、助けてあげましょうよ……、さあ、動いて！」

「僕にどうしろっていうんだ？」彼は怒りを爆発させた。「僕が引っ張っていけるとでも？ 背負っていけると？ 馬の相手までしろっていうのか！ こいつがどうやって歩くと思うんだ？ 半分死んじまっているのかわからないのか？」

「何か食べるものを持ってきてあげたらどうかしら？」

「ついでに飲みものも持ってこいってな！」

「ああ、ひどいわ、ニーノ！」イーダは目に涙を浮かべていった。そして身をかがめ、嫌悪感を押し殺しつつかろうじて馬の頭を撫でてやると、馬はやっとのことで地面から身を起こし

て前足の膝で立ち、その限りない苦悩に落胆しながらも、もたげた首に、その表情に、最後に残された崇高な美しさを見せていた。

ニーノは、血が上ったからか、激しい苛立ちのためか、あるいは走って汗をかいたからか、不意にぞくぞくして強烈な身震いに襲われ、体じゅうを駆けめぐり奇妙な震えに歯をガチガチと鳴らしはじめ、本能的にジャケットの襟を立てるとポケットに手を入れて、陰鬱に自らの殻に閉じこもり、打ひしがれた様子で、その場を離れて石の上に腰を下ろした。

もはや日は沈んでいた。遠くから丘の下の大通りを行く馬車の鈴の音が響いていた。

なぜこんなふうに歯が鳴ってしまうのか？ それなのに額はやけどするほど熱く、血管を流れる血が沸き立ち、耳鳴りがした。遠くの方であまたの鐘が鳴り響いているように思えた。その不安のすべて、待つことの苦しみ、イーダの身勝手な冷酷さ、今しがたあれほどに走ったこと、そして今あそこにいる馬、その忌々しい馬……。ああ、これは夢なのか？ 悪夢なのか？ 熱があるのだろうか？ きっと何か悪い病気なのだ、そうに決まっている！ 真っ暗だ、ああ、真っ暗じゃないか！ それとも、目まで利かなくなってしまったのか？ 彼は話すことも叫ぶこともできなかった。「イーダ！ イーダ！」と呼びかけたが、渴ききってほとんど痺れている喉からは、もう声が出なかった。

イーダはどこにいるのか？ 何をしているのか？

彼女は遠く離れた農家へ、その馬を救おうと助けを求めて飛んでいったが、まさにその家の農夫たちが瀕死の動物をそこへ引きずってきたなどということは考えもしないのだった。

彼はひとりぼっちで石の上に腰かけたまま、酷くなる一方の震えにすっかり翻弄されていた。背を丸め、木にとまった大きなフクロウのように、体ぜんたいを抱え込みながら不意に垣間見たのは、まさにふさわしいといえるもの、ひどく残酷で、別世界の光景さながらであるがゆえ、このとき、ふさわしいと彼には思えるものだった。月。ゆっくりと、麦の刈り株の黄色い海から昇る大きな月。そのおぼろに見えるとてつもなく大きな赤銅色の丸い月の中に、首を伸ばしてなおも待っているこの馬の骸骨のような頭が黒々と映っていた。おそらくはずっと待ち続けるのだろうが、それは赤銅色の丸い月に、こんなにも黒く、くっきりと浮かび上がり、その一方で、カラスが円を描きながら、空高くカーカーと鳴いていた。

農家にいったイーダが失望し、憤慨し、平原で茫然として「ニーノ！ ニーノ！」と叫びながら戻ってきたとき、月はすでに高くなっていた。馬は再び死んだように倒れていた。そしてニーノは……。「ニーノ、どこ？ ああ、あそこ、彼も倒れてる」

あそこで眠ってしまったのか？

イーダは彼のもとへ走った。彼女が見つけたのはぜいぜいと息をし、馬と同じようにほとんど黒ずんだ顔を地面に伏せ、腫れぼったい目をぎゅっと閉じてのぼせたようになっているニーノだった。

「ああ、何てこと！」

彼女はまるで我を失ったかのように辺りを見回して、握っていた手を開いた。そこには、馬に食べさせようとあの農家から持ってきたわずかな乾燥ソラマメが握られていた。イーダは月に目をやり、それから馬に、そして死んでしまったように地面に横たわるこの男にも目をやると、気を失いそうになって、不意に、目の前のすべてが現実ではないような疑念に襲われた。そして恐怖に取り憑かれて大きな声で父親を呼びながら、屋敷に向かって逃げだした。父親が自分を連れだしてくれたら、ああ、神様、ぜひと息をしているその男のもとから連れだしてくれたら……。なぜなのだろう！ その馬から逃れられたら、あの狂った月のもとから、空で鳴くカラスのもとから逃れられたら……。逃れて、逃れて……。

(翻訳：日伊協会文芸翻訳クラス・土屋香菜子)

Un cavallo nella luna (Luigi Pirandello)

原文はこちらからご覧になれます↓

[http://www.pirandelloweb.com/novelle/1925.02 donna mimma/09.1908 un cavallo nella luna.htm](http://www.pirandelloweb.com/novelle/1925.02_donna_mimma/09.1908_un_cavallo_nella_luna.htm)